編纂所だより

大阪市史編纂所（発行）
平成２２年２月発行
第34号
大阪市史料調査会（編集）
〒550-0014 大阪市西区北堀江4-3-2
大阪市立中央図書館内　TEL 06-6539-3333

◎『新修大阪市史　史料編』第３巻（第７回配本）「中世II」を刊行

今回の第３巻は、本文編第２巻に対応するもので、保元元年（１１５６）～明徳３年（１３９２）の大阪市域にかかわる史料を収載しています。内容は、中世の大阪を代表する武士団渡辺党の活動、四天王寺・住吉社の発展、中世大阪の荘園、南北朝内乱期の大阪など、これまで知られることのなかった新事実や新出史料を多く取り上げています。（Ａ５判８４０頁、本体価格５，５００円）

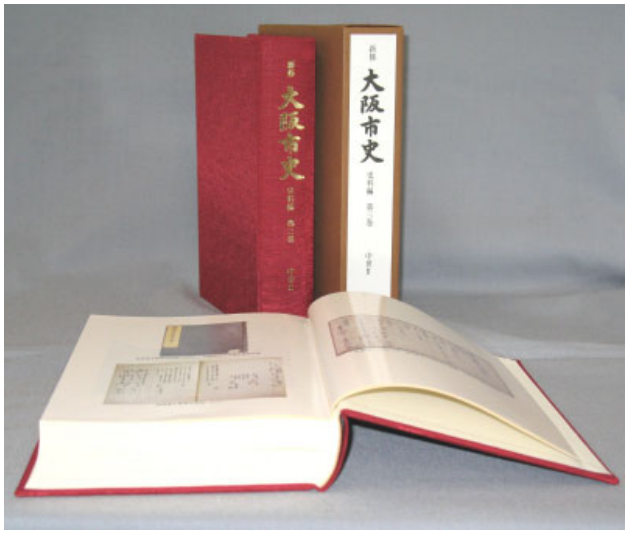
◎渡辺党の物語

平安時代から室町時代にかけて、大阪には渡辺党という武士団がいました。一般的な武士とは異なり広大な領地を持たず、淀川下流域から大阪湾岸の水上交通を支配していました。

説話や物語で有名な渡辺党の英雄は、源頼光にしたがい大江山の酒呑童子を退治した渡辺綱でしょう。彼を主人公とした別の鬼退治の説話があり、『平家物語』（剣巻）でも採り上げられています。京都の堀川にかかる一条戻り橋で美女に会い、五条辺りまで送る途中、鬼に変じた女の腕を切り落としたというものです。

源氏と平家の争いを描いた『平家物語』やその系統本のひとつである『源平盛衰記』（『盛衰記』と略記）には、源頼政の兵士として活躍する渡辺党が登場します（頼政は以仁王に挙兵をすすめ、源氏として最初に平家に反旗をひるがえした武将です）。そのいくつかを紹介しましょう。

延暦寺の僧兵が日吉神社の神輿とともに御所に押し寄せたときには、源頼政の使者にたった渡辺唱が弁舌さわやかに僧兵らを説得し、頼政が守る御所の門を攻撃するのをやめさせました。



頼政が以仁王とともに三井寺に走ったとき、渡辺競が遅れ、平家の大将（宗盛）から呼び出しを受けました。競は平家に従うとみせかけ、言葉巧みに名馬をもらい三井寺にかけつけ、平家方の鼻をあかしています。ほかにも三井寺から洛中の平家軍を攻撃する場面、頼政らが三井寺から奈良に向かう途中、宇治川をはさんで平家方に最期の戦いを挑む場面でも渡辺党の名前があがっています。

ところで『平家物語』と『盛衰記』ではいくつかの違いがあります。

近衛天皇の時、御所に鵺という化け物が現れて天皇を悩ませました。その退治を命じられたのが頼政でした。このとき『平家物語』では頼政は遠江国の住人井早太を連れて鵺を退治します。しかし『盛衰記』では渡辺唱が加わります。また鵺の死体を『平家物語』では空舟にのせ西海に流すのに対し、『盛衰記』では清水寺の岡に埋めたと記しています。

渡辺党出身で神護寺を中心に活躍した僧侶に文覚がいます。『平家物語』・『盛衰記』には文覚の物語も多く採用されています。

文覚は院の御所で神護寺への寄附を声高に要求したために、伊豆国に流罪になります。この場面、『平家物語』では京都から陸路東海道を東へ進み、伊勢国から船で伊豆に向かったことになっています。ところが『盛衰記』では渡辺党の省が護送責任者となり、淀川を下り渡辺から乗船して南海道経由で東国に向かっています。途中、渡辺に数日間留まりますが、この間、渡辺党が当番をきめて文覚を警護したといいます。京都から関東に向かうならば『平家物語』が描く東海道ルートが妥当でしょう。『盛衰記』が渡辺（大阪）から紀伊半島を迂回するコースに変更したのは、渡辺を登場させたかったからだと考えられます。

ちなみに文覚の護送には検非違使庁の下級役人があたります。下級役人は京・白川（白河）の知人に手紙を書くよう文覚に勧めます。文覚は彼らをからかって、自分の財宝を京都の五条天神の鳥居下に埋めたというデマを流します。また、伊豆に渡った文覚が源頼朝に近づき、平家を倒すよう説得するのですが、まず弟子を送って頼朝に京・白川のことから公家・院とのことまでを話題にします。この２つのエピソードは『盛衰記』だけに見られます。

『平家物語』・『盛衰記』は琵琶法師らが、貴族から庶民にいたるさまざまな階層の人々に語り歩くうちにまとめられたものです。語られるうちに本当にあったことから大きくずれたり、本当にはなかったことが物語に加わったりしていると考えられます。そのひとつに渡辺党の物語があり、『平家物語』よりも『盛衰記』にその多くが採用されたようです。（野高宏之）

◎中世の大阪を訪れた人々

日本の中世という時代は、源頼朝が鎌倉幕府を開いてから、武士の支配する世の中になったと一般的に理解されています。しかし、鎌倉幕府が成立しても、それ以前から日本の政治を主導していた公家（朝廷）は健在であり、京都とその周辺の国々に対する政治的な影響力を持ち続けていました。そして、鎌倉時代の大阪も幕府よりは公家との繋がりが強い地域でした。難波宮の廃絶（７８４）以降、公家との関係が途切れたように思われがちですが、平安時代から流行した熊野参詣や、四天王寺・住吉社への参詣により、中世を通して多くの貴族や上皇が大阪を訪れ滞在していました。

公家社会の中で、とりわけ頻繁に四天王寺に参詣したのが、後白河法皇です。法皇は、文治３年（１１８７）８月に、現在も残る五智光院という堂舎を建て、そこで仏教の儀式を行ったり、長期間滞在して、政務を執ることもありました。その約１００年後の弘安８年（１２８５）１０月には、後醍醐天皇の祖父にあたる亀山上皇が四天王寺に参詣しています。上皇は、当時の四天王寺境内にあった「安井殿」と呼ばれた殿舎を行宮（仮の皇居）としており、１０日間もの間、大阪に滞在しました（この「安井殿」は、慶長２０年（１６１５）の大坂夏の陣で真田幸村が戦死した場所と伝えられる安居神社にあたります）。このときの滞在での亀山上皇は、自ら馬に乗り住吉社に出かけたり、貴族たちが用意した船で夕暮れの大阪湾岸を巡航し、船上での宴を行ったりしており、四天王寺や住吉社に対する信仰だけではなく、いわゆる観光の

ような目的もあったようです。

また、鎌倉時代になれば、上皇や貴族だけではなく、当然、鎌倉幕府を成立させた武士たちも大阪にやって来ます。源頼朝は、建久６年（１１９５）の３月に、平家を滅ぼしてから二度目の上洛を果たします。その年の５月に、頼朝は御家人たちを率いて四天王寺に参詣しました。源平合戦のときに源義経が率いる東国の武士団が大阪に駐留したことはありましたが、武家の棟梁である頼朝自らが東国武士たちを率いてやって来たのは初めてのことであり、彼らが上町台地を南下し、四天王寺の境内を埋め尽くすという光景は、当時の大阪の人々に衝撃を与えたに違いありません。

ちなみにその４ヶ月後の９月には、一条能保という貴族が息子らとともに四天王寺に参詣しています。一条能保は、頼朝の妹を妻としており、頼朝の権威を後ろ盾にして公家社会での地位を高めた人物です。このとき、能保の息子である高能は、住吉の海浜を遊覧するために住吉社に向かいました。住吉社では第４４代神主の津守長盛が、高能を丁重に迎えようとしてご馳走などの準備をしていましたが、突如、高能から鏑矢を射られたので逃げ出そうとしたところ、高能らに折檻されそうになるという事件が起こりました。

一条高能がこのような暴挙に及んだ明確な理由はわかりませんが、古くから貴族らの厚い崇敬をうける住吉社の神主に対するこうした振る舞いは、前代未聞のことです。悪ふざけのつもりで行ったのかもしれませんが、父とその背後にいる頼朝の威光を笠に着ていたことは確かでしょう。

このように鎌倉時代の大阪は、平安時代以来、貴族・武士たちにとって四天王寺・住吉社を中心とした信仰の地であるとともに、また住吉の海浜を訪れた一条高能や大阪湾岸を巡航した亀山上皇のように、遊覧の場所でもありました。いずれも私たちが日頃から慣れ親しんだ場所ですが、そこには中世という時代を動かした源頼朝や後白河法皇たちの足跡が残されていることを実感してみてください。　　（生駒孝臣）

○大阪の歴史　第74号

主な内容のご紹介
藤田　実「絵葉書でみる明治末～大正初年の千日前」
古川武志「大阪歌謡史―その二」
堀田暁生「真田山陸軍墓地墓碑改葬関係書類について」
金田　稔「編纂所三十年に寄せて」など
（1冊700円+送料210円）

○大阪市史史料　第74輯　「南木芳太郎日記（一）」

本輯は昭和６年に大阪の郷土研究雑誌『上方』を発行した郷土史家南木芳太郎の日記です。大阪市史編纂所が所蔵する南木芳太郎の日記１５冊の内、昭和５年分を翻刻紹介しています。『上方』発行へ向けた南木の奔走ぶりや、当時の郷土研究の現状、大阪の文化状況など貴重な内容を多く含んでいます。（1冊1，800円+送料290円）

刊行物販売先　旭屋書店（大阪本店）、大阪歴史博物館、ジュンク堂書店（大阪本店・千日前店・難波店）、大阪市史料調査会（大阪市立中央図書館３階）ほか。なお書店では消費税が加算されます。詳しくは大阪市史料調査会までお問い合わせ下さい。

絵はがきでみる昔の大阪（１２）
大阪心斎橋筋（明治末～大正１０年頃）

絵はがきに写っている場所は、当時の心斎橋筋２丁目で、三津寺筋と八幡筋の間になります。南から北を望んでいる構図になっています。目につくのは、画面中央右側の「高」の字です。これは高島屋の看板で、この時期には心斎橋筋に高島屋があったことがわかります。高島屋は明治３１年（１８９８）に、京都の飯田呉服店が、もとあった丸亀屋呉服店を買収して大阪に進出してきました。この丸亀屋を経営していた田村太兵衛は、店を高島屋に売却した年の秋に、大阪市長に就任しています。すなわちこの場所は初代大阪市長が、市長になる数ヶ月前まで店を構えていたところだったのです。

この高島屋は大正１１年（１９２２）には長堀橋に移転していますので、この写真はそれまでの時期のものです。高島屋の奥にある丸い看板には「今治水」とあります。これは医薬品製造販売をしていた丹平商会です。「今治水」とは歯痛を押さえる水薬のことで、よく売れたそうです。もうひとつよく売れた薬として脳神経薬の「健脳丸」もあります。丹平商会は明治２７年の創業で、大正１３年には３階建ての複合商業ビル丹平ハウスを建てます。

高島屋の手前の方には時計を模した丸い看板がめだっています。これは、岩橋時計店で、貝塚で望遠鏡を製作した岩橋善兵衛の子孫の店です。

さて、画面の左端には大丸の桃燈が見えます。下の看板の文字が見にくいのですが、「赤大丸・・」とあるようです。『心斎橋筋の文化史』（心斎橋筋商店街振興組合発行、平成９年）によると、「赤大丸染織物店飯田」という店で、明治３８年に創業とあります。この並びには、明治２７年創業で現存の「てんぐ履物舗」もありました。

明治末年から大正１０年代頃、人通りの多い心斎橋筋の情景がよくわかる秀逸な絵葉書です。

（堀田暁生）

▼大阪市史編纂所では、所の仕事の紹介や、刊行物の案内などのため、ホームページを開設しています。こちらもご覧ください。
http://www.oml.city.osaka.jp/hensansho/